

- ▶ 上野小学校 ☎28-2133
- ▶ 金田中学校 ☎22-0136
- ▶ 赤池中学校 ☎28-2117



上野小PTA新聞「たきの音」が全国コンクールで快挙達成

上野小学校が発行するPTA新聞「たきの音」が第34回全国小・中学校PTA広報紙コンクールで日本PTA全国協議会会長賞を受賞しました。



見出し文章などが審査され、「たきの音」は文部科学大臣賞に次ぐ会長賞を受賞。広報委員長の犬丸成美さんは、委員で分業しながら協力して作成しています。それぞれ仕事や家事をしながら、委員が一丸となって手にした受賞。これからもみんなで力を合わせ親しみやすい広報紙作りを頑張りたい」と、意欲を燃やしていました。



→最大10ページにもおよぶボリュームで細かな記事まで掲載する「たきの音」。



↑東京で行われた表彰式に広報委員長の犬丸成美さん(左)とPTA会長の山中清美さん(右)が出席。

「税の標語」で金田中の1年生がダブル受賞



金田中学校の野田胡桃さんが全国間税会総連合会に入賞、岡優希さんが田川関税会会長賞を受賞しました。これは、11月11日～17日の「税を考える週間」に合わせ、税の意義などを理解してもらうことを目的に全国間税会総連合会が毎年行っている取り組み。2人は「このような賞がもらえてうれしい。2年生になってもまた受賞できるよう頑張りたい」と、再挑戦を誓いました。

中学生が抱く“鋭い人権感覚”を町が表彰

11月15日に地域交流センターで、「第32回全国中学生人権作文コンテスト」の福智町長表彰が行われました。次代を担う中学生に人権感覚を身につけてもらおうと、昭和56年から行われている同コンテスト。力作の中から3作品が選ばれ、県への推薦を受けました。【順位】1位 末政廉さん(金田中3年)、2位 花岡志音さん(金田中2年)、3位 野瀬春香さん(赤池中3年)。



それぞれの夢や気持ちを各学校の代表として堂々と発表した8人。発表者たちの熱い想いに会場からは惜しみない拍手が送られていました。

方城中2年

富田 悠平さん

Title 「食と命に感謝して」



終戦から六十七年。今の僕たちの生活は食べる物にも困らないのが当たり前だが、戦時中はそうではなかった。僕は夏休み、祖父母に戦時中どんな思いでいたかを聞いてみた。米の代わりに麦。おかずの代わりに芋など、それも一日に一回、ほんの少しの量。今ではとても考えられない。戦時中、アメリカ軍は定期的に飛行機から地上へと兵に食糧を配給していた。その食糧の一部の人は拾いに行って食べていたという。アメリカが配給していたのは缶詰などだったので、そのころ手に入りにくかった物に違いない。しかし、拾うと捕まるので、祖母たちは取りに行かなかったらしい。「捕まって今よりひどい生活になるかもしれない。でも、食べたい。食べさせてあげたい。」という思いに悩まされた。その言葉が深く印象に残っている。亡くなったもう一人の祖父は戦地へ向かうために飛行機に乗ろうとしたとき、敵がそこに向けて爆弾を落として祖父はその衝撃で吹き飛んだらしい。そして目覚めると病院にいた。そのとき、祖父の友人はすでに飛行機に乗っていたらしく、みんな亡くなった。戦争の時代を生きた僕、食べる物や生活に苦勞をしたけれど、今の僕たちに命をつないできてくれた。だからこそ僕たちは、食のありがたみや、生きていくことのすばらしさに感謝すべきだと思う。僕も祖父や祖母に負けずに、「食と命」というありがたさを胸に力強く生きていきたいと思う。

このごろいじめの報道をよく見ます。皆さんはいじめについてどう思いますか。ほとんどの人はいじめは悪いことだと答えると思います。では、なぜいじめは無くないのでしょうか。いじめがなくならないのは、僕たちが聞く言葉、使う言葉に対してあまりに無防備だからだと思います。テレビ・ネットなど身の回りに激しい、汚い言葉があふれています。「きもい」「うざい」「よるな」「殺すぞ」「死ね」。どれもひどい言葉です。相手に投げつけることによって自分が強いんだと錯覚してしまう、激しい、汚い、危険な言葉です。しかし、どれもひどい言葉なのに、それほどひどいと感じなくなっている自分はいないでしょうか。身の回りにはあふれすぎていて麻痺しているのです。言葉に対する麻痺は、そのまま心の麻痺なのです。僕たちは考える言葉、話す言葉を選べます。汚い言葉には耳をふさいで自分でも言わないようにし、優しい言葉には素直に感心して自分も相手のことを思いやる心で言葉を発することです。いじめはいじめる側の心の問題です。人の優しい行いを見たとき、「すごいね」なのか「きもい」なのか、人から注意を受けたとき、「ごめんね」なのか「うるせえ」なのか、普段自分が考え、話す言葉をもう一度振り返ってみませんか。世の中に、心に闇をつくらぬ意思と正しい言葉が広がったとき、きっといじめは無くなっていると僕は信じます。

金田中2年

相原 有輝也さん

Title 「いじめは言葉の闇から」



赤池中2年

本城 慶矩さん

Title 「将来の僕の夢」



中学生になって将来のことをよく考えるようになった。今までの体験を通して、自分の中にぼんやり浮かんだ「夢」に気がつくようになったのだ。一つは小学校の時。「あ！」小学生だった僕は驚きの声を上げた。家の前にとまっていたその小さな青い車体はきらきら輝いていた。それは僕のあこがれの「ポケットバイク」だった。僕は早速父を探した。尋ねると父が僕のために仕事場の友達からもらってきてくれたものだった。父は僕のバイク好きを誰よりもわかっていてくれたのだ。ぼくはこのときから、「将来はバイクに乗る仕事をしたい」。僕はそう胸に誓った。二つめは野球チームに入った時。野球に全く詳しくなかった僕だが、仲間が優しく教えてくれ、ぼくはピッチャーとしてマウンドに立たせてもらうことが多くなった。試合では仲間たちは必ず「打たせていいよ。バックがついているから」と声をかけてくれた。父や監督は厳しく指導をしてくれ、母は試合のたびに僕が好きなおかずを入れた弁当をもたせてくれた。日々の練習の中でたくさんの人が僕を支えてくれていることに気がつくようになった。僕は中学生になり、今までの体験で受けてきた周囲への感謝の気持ちを何かの形で返していきたい、と思うようになった。今、僕の夢は「交通機動隊」つまり「白バイ隊員」だ。大好きなバイクで地域の安全と平和を守る、そんな仕事をしたい。僕は必ず夢を実現させるつもりだ。